



Title	大正・昭和初期における黒地婚礼衣裳の流行：百貨店との関わりを中心に
Author(s)	劉, 玲芳
Citation	間谷論集. 2024, 18, p. 17-38
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95437
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〈研究論文〉

大正・昭和初期における黒地婚礼衣裳の流行

——百貨店との関わりを中心に——

劉 玲芳

〈キーワード〉 黒地の婚礼衣裳 百貨店 婚礼衣裳陳列会 流行

はじめに

明治時代は広く知られるようになった激動の時代であり、特に明治維新以降においては、政治制度、経済、教育など多岐にわたり大規模な変革が起こった。社会全体が、住まいから食文化、生活様式に至るまで、徐々に変容していく中で、人々の身近な文化である服飾もまた様々な変化が見られた。稿者は過去に、花嫁の髪型と式服（儀式の服）に焦点を当て、和装の婚礼衣裳が洋風化する中で、具体的な変化やその変容の経緯について考察してきた。その中で、大正・昭和初期において、黒地の婚礼衣裳（振袖・留袖を含む）が百貨店の定番となり、特に都市部の女性に広く愛用されていた事実が確認できる。しかしながら、色直しの黒地の婚礼衣裳がなぜ大正・昭和初期に大流行の婚礼衣裳となったのか、そして、百貨店がその流行にどのように関与していたのかといった疑問が残っている。

先行研究の中には、黒地の婚礼衣裳に関する論述が見受けられる。例えば、日本風俗史研究の基礎を築いた江馬務氏によれば、もともと白無垢が使用される習慣が徐々に廃れ、それに代わって、色直しに用いる略装が婚礼の盛装となり、具体的には、黒裾紋様紋付の衣服に揚帽子の花嫁色直しの略装が婚礼の盛装となったとされている¹。また、長崎巖は、江戸時代から明治維新を通じて受け継がれてきた婚礼衣裳が初めは三色の振袖を重ね着する形態であったが、明治後半以降には黒地の振袖が式三献の儀式で用いられるようになったと指摘している²。一

方で、黒地の婚礼衣裳の人気を示す研究も存在しており、20世紀初頭にハワイに渡り、日本人男性移民と結婚した日本女性の花嫁の写真から、日本本土の流行を反映した黒紋付裾模様の婚礼衣裳が確認できるとされている³。これらの先行研究を通じて、時代の変遷に伴い、黒地の婚礼衣裳がやや低い格式の色直しの服から、最も高い格式を持つ式服⁴へと変遷していったことが明確になる。しかし、大正・昭和初期において黒地の婚礼衣裳が最も流行した経緯についてはまだ十分に理解が進んでいない。本稿では、大正時代から昭和初期にかけての黒地の婚礼衣裳の流行に焦点を当て、その実態と変遷過程を明らかにする。さらに、黒地の婚礼衣裳が流行した経緯において、呉服屋系百貨店がどのように関与していたかについても考察する。

なお、「黒地の婚礼衣裳」と一言で表すと誤解を招く可能性が高いため、本稿ではわざわざ2種類に分けることとする。一つは、伝統風（旧型）のもので、具体的には「三つ襲」の形に属するものである⁵。もう一つは、大正・昭和初期に現れた新型のものである。それぞれの特徴を示すと、伝統風のは、地色を「三つ揃い」あるいは模様を「三つ揃い」の形であり、必ずセットで着用されることが一般的であった。加えて、これは披露宴で利用され、花嫁の婚礼衣裳の中で「色直しの服」として位置づけられている。一方、大正・昭和初期における新型の黒地の婚礼衣裳は、「三つ襲」のように三枚揃いで着用する必要がない。これは主に式三献に着用され、花嫁の衣裳の中で最も格式が高い「式服」として位置づけられている。本稿で論じる対象は主に大正・昭和初期における新型の黒地の婚礼衣裳を指すことを、あらかじめ断っておく。

1. 近代の婚礼衣裳における「白」と「黒」

婚礼衣裳の歴史については、時代、地域、身分、風習などの違いによって大きな差異が生じ、非常に複雑なものとなっている。大まかに説明すると、近代以前においては江戸時代の武家の花嫁に特有であった白の衣裳が、庶民の間でも広まり、裕福な町人層の花嫁衣裳には白無垢が用いられるようになった。それに続いて、明治時代の中頃まで、花婿は黒地の紋付羽織袴、花嫁は白無垢と呼ばれる和装が一般的であった⁶。

ところが、明治時代後半から昭和初期にかけて、女性の婚礼衣裳においては黒地の振袖が主流となった。先行研究によれば、黒地の婚礼衣裳は花嫁衣裳の中で略装から婚礼の正装（盛装）へと変遷していったことが明確に指摘されている。その理由について、長崎巖氏は、明治時代以降、結婚式を挙げる階層が旧町人を中心に広がり、経済状況に見合った経費で婚礼を行うようになったことを指摘している⁷。明治時代以降、結婚式を挙げる階層の拡大に伴い、新しい階層に合わせて簡略化された婚礼衣裳が成立した。具体的に説明すると、もともとは内側から白地・赤地・黒地という順番に揃いで着用するか、あるいは白地→赤地→黒地という順番に3回に分けて着替えて着用する衣裳が一般的であった。しかし、最終的には白地や赤地の衣裳が省略され、黒地だけが残ри、婚礼衣裳の主流となったという。

1-1. 誤用された黒地の婚礼衣裳

確かに、結婚式の格式は階層に応じて異なるが、経済的な理由から、婚礼衣裳を簡略化し儀式を行う人々は少なくなかった。しかしながら、他にも理由があったのだろうか。実は、本来、「色直しの服」としての黒地の婚礼衣裳が「式服」に変わった背景には、誤用が絡んでいたのである。

明治末頃において、婚礼衣裳の中において、白地と黒地の衣裳をどのように使い分けるかを詳しく説明している資料が存在する。有名な呉服屋である白木屋が創刊した『家庭のしるべ』において、しばしば婚礼の式法に関連する記事を掲載している⁸。その中の第8号の「式法」（婚礼の部・6号の続）において、「古法を按ずるに、婚姻式場に於いては嫁女の衣文及び衾に至るまで都で白地に幸菱の綾織に限れるものなりし」と述べ、都では白地の幸菱の綾織の衣裳は本来儀式の服であったとしている。その後、「今は機業の進歩に伴って競って……古法を守るもの漸く稀なるが如しと雖も、白無垢を以て真の礼服とすることは今に渝らず」とし、古法を守る人が減ったとしても、白無垢は正統的な婚礼衣裳の式服であると指摘している。その続きで、たとえば白無垢でなくても、少し略した場合、白に次いで極めて薄色の紋様付き三枚襲を用いることがあったと述べられている。ここから、色が白、あるいは白に近い極めて薄い色ほど、式服として相応し

いとされていることが分かる。

しかし、同資料には「目下は登時^{そのとき}の流行色を撰ぶに至れり、而して竟^{つゐ}に地色の濃淡に拘らず流行色を用ゐ始めた結果世人が誤つて黒紋付を正服と思ひ差へ、黒紋付に白下を誤り用ゆるに至りたるが如し」と人々は当初、流行している色の影響により、黒紋付の衣裳を誤って最も格式が高い式服として使用してしまった事例があったと述べている。また、「黒紋付に白下^{しうよう}を用ゆるは往昔^{むかし}より色直しの正服として襲用^{しうよう}し来りたるものにて決して合盃式の場合に用ゆべきものに非ず」と、黒地の婚礼衣裳を色直しの正服であると明言し、盃事の儀式の衣裳に使用することは不適切だと述べている。

さらに、「式法」(婚礼の部・6号の続)が提示するところによれば、なぜ色直しの黒地の衣裳が盃事に使用されるようになったのかという疑問には答えがある。本来合盃事の儀式は陰の式であり、花嫁から始まり、一方で色直しの盃事は陽の式であり、花婿から始まる法とされている。従って、合盃事の際に花嫁の衣裳は陰に相応しい白い衣裳が使用されていた。しかしながら、色直しの盃事が次第に省略され、花嫁が衣裳を替えることによって、最終的には花嫁の衣裳にも色直しの衣裳を合盃事に使用するようになったという経緯がある⁹。要するに、色直しの盃事が省略されることによって、色直しの衣裳(ここで黒地の衣裳)が白無垢を取り替えて式服となった情報が読み取れるのである。

以上の内容を要約すると、式法に基づく、1900年代では白無垢が婚礼衣裳の式服として依然として最も格式が高い一方で、黒地の婚礼衣裳は本来ならば色直しの衣裳とされていた。当時の一部の人々は、古法に照らせば、黒地の婚礼衣裳を式服として用いることは誤りであると、老舗であり有名な呉服屋が指摘していた。

実は、黒地の婚礼衣裳が式服として誤用される背景にはもう一つの理由が存在した。女性にとって黒色が好まれたもう一つの理由は、白のようなシンプルなものではなく、模様をつけることで様々な可能性が広がるからである。1925年10月ごろ、女性誌『主婦の友』に所属する菅野田鶴子が、婚礼調度相談所の一員として「結婚の式服は純白が正式で、模様物はたとひ黒であり、振袖でありまして、略式であります」¹⁰とし、白無垢が式服であることを強調している。その

後、彼女は黒地の衣裳が「いつの頃からか略式に変わって、真に莊嚴に真に意義深くといふをが、ただ華やかにただ美しくといふ風になってしまった」と嘆いている。ここから、純白の白無垢を諦めて黒地の衣裳を選ぶ理由には、当時の女性たちの審美意識の変化があったと推測される。つまり、花嫁の「純潔」を象徴する白無垢は地味なものと思われ、代わりに黒地の着物に様々な模様をつけて派手で美しいものにすることができる方法が、若い女性たちの心を引き寄せた可能性がある。一方で、1920年代において、黒地で模様が施された振袖、通称黒地の婚礼衣裳が伝統的な白無垢に取って代わり、一般的に花嫁に選ばれていた存在となっていたことが伺える。

1-2. 「白」と「黒」の逆転

1920年代の呉服屋系百貨店が提供していた婚礼衣裳に関する資料から、黒地の婚礼衣裳がどれほど人気であったかを示す情報を発見した。1926年11月、『婦女界』には、当時東京で最も人気のあった5大呉服店が好む婚礼衣裳が紹介された記事が掲載された¹¹。これらの呉服店は、高島屋、三越、白木屋、丸菱、松坂屋といった老舗であり、1900年代以降、これらの呉服屋は百貨店に転身し、日本の最先端のファッションを提案してきた。『婦女界』に掲載されている口絵写真には、5大呉服店が当時の流行を反映させ、各店舗の特徴を生かした婚礼衣裳が写っている。また、新調された衣裳を人形に着せ、1週間にわたり婦女界代理部で開催された陳列会で観客に披露されたことが明記されている。

さて、当時の流行の婚礼衣裳は具体的にどのようなものであったかを、以下の内容を通して見ていこう。「(1) 高島屋の訪問服：ミラネーゼ訪問着、(2) 三越好みの振袖：黒一越縮緬紋付振袖胸模様。有騒風の松竹梅の外に、華麗な鳳凰、大乱菊、牡丹の写生風模様を巧みに配した、明快な感じの模様です。(3) 白木屋好みの振袖：黒古濱縮緬二枚襲。黒の式服としては、極めて自由な梅、菊、葵などの花模様に、七宝や網代を配し衿から前身にかけて空色ぼかしにした新様式で、束髪の方などに一層ふさわしいものです。(4) 丸菱好みの振袖：黒古濱縮緬振袖胸模様。文金高島田向の高雅な模様です。松竹梅に牡丹その他の花に鴛鴦の模様で、胸から肩にも十分模様が配してあります。(5) 松坂屋好みの振袖：黒古

濱縮緬振袖胸模様。光琳風の松竹梅に、雲に鶴を配し、亀田模様に田を利かせた、極めて手の込んだ上品な模様です」という具合であった。

上記の内容から明らかなように、5大呉服店が提案した5着の婚礼衣裳の中で、なんと4着もが黒地の振袖であることが分かる。高島屋を除くと、三越は黒一越縮緬紋付振袖胸模様、白木屋は黒古濱縮緬二枚襲、丸菱と松坂屋は同じく黒古濱縮緬振袖胸模様を提案している。各婚礼衣裳の詳細な情報については、記事の前に掲載された口絵を通じて理解できる。

また、1934年の『読売新聞』には、写真とともに日本の結婚の儀礼の服の変遷を紹介した資料がある¹²。記事冒頭では、近づく結婚月に向けて、読者に対して式服の種類と使い方について説明している。面白いことに、中に6つの小袖形状の衣裳はほぼ均等に「白」と「黒」の系統に分かれている。白系統に属するものは、「純白の打掛」「白地刺繍模様の打掛」「白地に華やかな模様を染め出した振袖」の3着で、黒系統に属するものはそれぞれ、「黒地の振袖模様（胸模様）」「黒地に留袖（裾模様）」「ラッキー振袖（振袖と留袖の両方の機能を果たすもの）」となっている。この記事の内容は、1930年代の人々にとって、振袖と留袖を含めて黒地の婚礼衣裳は白系統の花嫁衣裳と肩を並べるようになったことが示唆されている。

以上の内容を総合的に考えると、1920年代以降、黒地の婚礼衣裳が大いに流行したと推測される。さらに、4つの百貨店が提案している婚礼衣裳もいずれも黒地の振袖であったことが注目すべき点である。先に述べたような資料によれば、1905年に白木屋が『家庭のしるべ』において、黒地の婚礼衣裳は本来なら色直しの衣裳であるため、式三献には着用できないと指摘したものの、1926年になると、この白木屋でも「黒古濱縮緬二枚襲」の振袖を式服として提案していることは興味深いものである。この約20年間に何かが変わったのだろうか。

2. 婚礼衣裳陳列会による流行の発信

明治時代、資本主義の形成期において、各種の物産を収集し、人々に展示して産業の発展を促進しようとする動きが特に盛んであった。1896（明治29）年3月、明治政府は農商務省内に商品陳列館を開設するよう命じ、それ以降1914（大

正 3) 年までに日本全国に約 40 か所の物産陳列館が設置された¹³。

2-1. 大阪発祥の婚礼衣裳陳列会

欧風の影響を受け、座売り販売を主体とする呉服屋の商慣習が変わりつつあった。かつての呉服店は、長い暖簾を掛け、店内では手代や小供が奥に控え、顧客に対して4～5種の見本を出して商売していた。しかし、1895年頃になり、迅速かつ効率的に対応する必要性が生まれたと認識した三越は、主客双方の便宜を図るために新しい陳列販売法を試みた。1900年10月、三越は座売りを全廃し、全館を陳列場として15日に新たに開店した¹⁴。同様に、大阪の高島屋も1896年頃に珍しい見本場と呼ばれる陳列場を設けたとのことである¹⁵。これにより、関東だけでなく、関西でも陳列販売が広がっていった。

これらの大手呉服屋の新しい取り組みは、世間の注目を集めた。新聞や雑誌には、次々と呉服関連の商品の陳列会のニュースが掲載された。例えば、1895年には『風俗画報』に「越後屋新案呉服陳列場」と題する記事があり、大きな呉服屋が新しい販売方法として呉服の見本を陳列し、正札をつけて販売する様子が紹介されている¹⁶。三越は早くも新柄陳列会を開催し、業界に大きな波紋を呼び起こした。頻繁に行われる新柄陳列会は、顧客の目を引く効果的な手段であり、1901年には『風俗画報』の記事で、三井呉服店が新柄陳列会を30日間開催したことが報じられている¹⁷。これらの陳列会は呉服屋の注目を集め、大きな話題を生み出した。

稿者が調査した結果、婚礼衣裳の陳列会を最初に開催したのは、1910年に高島屋心斎橋店の2階大広間で行われたようである。写真には、数着の贅沢な婚礼衣裳が展示され、横には着物に白いエプロンをかけた女性店員が立っている様子が収められている。その後、三越も積極的に婚礼衣裳陳列会を行っている情報が見つかった。ただし、注目すべきなのは、三越が婚礼衣裳陳列会を開催したのは東京本店ではなく、大阪の支店であったという事実である。1912年3月の『三越』には、当時の婚礼結納飾と床飾りの流行を紹介し、婚礼儀式を行う際の標準を提示している¹⁸。同時に、陳列会の様子を写した写真も掲載されている。

1915年1月に発行された『実業界』の「東洋名物大阪三越呉服店」によると、

大阪三越は近頃様々な催しを行っており、「4・11月に洋画展覧会を年に1回又は2回日本画を、12月に婚礼衣裳陳列会と、正月仕度陳列会とを…行なう」と述べられている¹⁹。この文脈から、12月という結婚式が多く挙げられる月に、大阪三越が婚礼衣裳陳列会を開催することがほぼ恒例になっていると読み取れる。

しかし、なぜ婚礼衣裳陳列会が大阪を起源にしているのかについての理由が問われる。前述の記事によれば、東京と大阪は異なる風土を持っており、客の好みや趣向も異なっている。それに加えて、関西では婚礼の儀式調度には東京よりもこだわりを持つため、関西の顧客に対し、商取引はより真剣に取り組むべきだとも強調している。これらの理由から、婚礼衣裳陳列会は、通常は目にするのが難しい婚礼衣裳を特に強調し、商品にこだわりのある関西の顧客を引き寄せるための手段であったと考えられる。

その後、東京の百貨店も婚礼衣裳の陳列会を行うようになった。1915年、上野広小路の松坂屋が10月1日から例年通り冬衣大売り出しを開催し、同時に婚礼衣裳陳列会も開催した情報が確認できる²⁰。ただし、当時の婚礼衣裳陳列会の詳細な内容は不明である。しかし、同年11月、大正天皇の大典が控えていた中、東京の4大呉服店の最新の流行に焦点を当てた記事がある。その中で、松坂屋は2階で婚礼衣裳陳列会を開催し、上流階層や中流家庭向けの婚礼衣裳の最新の流行を紹介している²¹。詳細な情報については、第3節で詳しく述べる。

さらに、婚礼衣裳陳列会の開催に際して、どのような陳列法を用いて売り上げを高めるかを紹介する商略的な資料まで現れた。『織物界』においては、まず、「(前略) 婚礼衣裳を陳列するという事は商略にならない」と指摘した後、「婚礼衣裳を売るという目的でなく、其衣裳を見物に来ると云う事によって、他のあらゆる商品が売れて行くという考えで催さなければならぬのである」と強調されている²²。ここでは、婚礼衣裳が単に陳列されて売るものではなく、むしろ客を集める手段として利用されていた情報が読み取れる。また、来客に婚礼衣裳そのものを見てもらうには、「店頭に『お嬢さんも奥さんも兎に角一度御覧置下さい』とか『どうか流行の婚礼衣裳をお話しの種に御覧下さい』とか云うような広告文句を書いて置くがよく、亦チラシ等到大々的に書いて置く方がよかろう」と、呉

服屋の経営者に具体的な方法が提案されている。より深く掘り下げて考えてみると、婚礼衣裳における「流行」は一体何なのかを考えると、呉服屋系百貨店の経営者たちが意図的に作り出した可能性は否定できないだろう。

2-2. 広告にみる「新しさ」

高島屋心斎橋店と大阪三越が婚礼衣裳陳列会を開催して以来、雑誌や新聞、そして百貨店自身の機関誌には、婚礼衣裳陳列会を宣伝する広告が頻繁に見られるようになった。松坂屋は、1915年9月30日付の『朝日新聞』において、婚礼衣裳陳列会を開催する情報を公開する広告を掲載した²³。その内容は、翌日の10月1日に行われる「冬衣大売出し」というイベントと同時に、「婚礼衣裳陳列会」を開催することを宣伝している。

それに続いて、三越（東京本店）は1916年11月に予定していた婚礼衣裳陳列会の宣伝に力を入れていた。具体的には、婚礼衣裳陳列会の開催日と場所をさまざまな雑誌に掲載して広報していた。初めての例として、三越は10月に自らの機関誌である『三越』で、翌月の18日から30日まで新館5階にて婚礼衣裳調度陳列会を開催することを告知した²⁴。そして、同じ情報を異なるデザインの広告として『東洋時報』にも掲載している²⁵。さらに、各地名産品陳列会や東京漫画会展覧会と一緒に、婚礼衣裳調度陳列会の情報も含んだ、同一のデザインと内容の広告を10月には『東京商業会議所月報』に、翌月には同時に『實力世界』、『世の中』にも載せている²⁶。

一方で、高島屋は1918年と1919年に、年に1度のペースで婚礼衣裳陳列会の広告を『朝日新聞』に載せた。例えば、1918年10月31日の『朝日新聞』には、翌日から10日までの期間で婚礼衣裳陳列会を開催することを予告していた。

その後、1920年代以降、『朝日新聞』と『読売新聞』の両新聞において、婚礼衣裳陳列会の広告が次第に増加していった。高島屋、白木屋、松坂屋、三越、松屋など、いわゆる五服会のメンバーは頻繁に両新聞に広告を出し続けた。例えば、1924年10月9日の『読売新聞』において、松坂屋は新しい商号「東京上野松坂屋」を使用して、婚礼衣裳陳列会の広告を載せた²⁷。広告の内容は、翌日から開催される婚礼衣裳陳列会と七五三祝着の販売催事であった。

1910年代の婚礼衣裳陳列会は、主に催しの日程と場所を広告に掲載し、他の陳列会や展覧会と同時に宣伝されていた。ところが、1920年代以降になると、婚礼衣裳陳列会が次第に独立した広告対象となり、宣伝文句も充実してきた。多くの広告で「新時代」「新しい味」「現代趣味」といったキーワードが強調されている。

例えば、1922年発行された『三越』には、「古風なものから、現代的趣味に至るまでの御婚礼衣裳一切を陳列致します」と、11月1日から7日まで三越の呉服部で行われる婚礼衣裳陳列会の情報が広告された²⁸。特に「現代的趣味」という言葉に注目である。これは、当時の趣味や婚礼衣裳が従来の古典的なものとは異なり、新しい時代の風習を反映していると考えられる。この表現は、呉服屋系百貨店が婚礼衣裳陳列会の広告で「新しさ」を強調した初めての例と見なせる。

三越は婚礼衣裳陳列会の宣伝に、機関誌の『三越』だけでなく、『朝日新聞』と『読売新聞』も同時に利用していた。例えば、1925年には、婚礼衣裳陳列会の開催予定を予告し、「御盛儀を飾る優美典麗な御召方で、古風なものから現代趣味に至る迄の御式服と御支度用等」と広告された²⁹。同様に、1926年にも婚礼衣裳陳列会の情報が、「御盛儀を飾る優美典麗な本式略式両様の御召物、古代趣味から現代流行にいたるまで」といったキャッチフレーズで広告されている³⁰。こうして、三越が「古代趣味」に加えて、「現代趣味」「現代流行」の婚礼衣裳も取り扱っていたことが確認でき、特に「現代趣味」や「現代流行」といった表現は、「おしゃれな」、「ハイカラ」、「モダン的な」意味を含んでおり、三越が自社の婚礼衣裳における革新をアピールしていたと考えられる。ちなみに、1920年代において、三越はこのような広告を長期にわたり、何回か新聞に載せていたようである。

その後、1924年9月には、白木屋呉服店が「婚礼衣裳調度品陳列」を宣伝する際、「当店独特の考案に依る新時代の婚礼衣裳調度品の組合せ陳列是非御覧を（後略）」とアピールしている³¹。ここで「新時代」の婚礼衣裳が重要なポイントとして打ち出されている。

それに続いて、1924年11月25日付の『朝日新聞』に掲載された松屋の広告には、「裾模様は弊店の自慢致す所で、古雅の裡に新し味をたたえた。色々の新

意匠を陳列致して御座います、是非ご覧を願ひます」と記載されている³²。「古雅」、つまり伝統的な要素に加えて、「新しい味」という新しいデザインやアプローチを取り入れ、様々な新しいアイデアを陳列していることを強調し、消費者にアピールしようとしている。一方で、新しい企画を考案し、婚礼衣裳陳列会の宣伝に力を入れる動きも見受けられた。1921年10月8日付の『読売新聞』（朝刊、4頁）には、高島屋に関する短い記事が掲載されている。記事によれば、「京橋の高島屋呉服店では八日から十五日まで同店独得の婚礼衣裳萬端を陳列する」とあり、特に「遠藤波津子女史着附の式服本衣裳姿新夫人姿更衣裳姿の美しい人形飾を三階に陳列した」との情報が伝えられている。この情報を通じて、高島屋が最も早く人形に婚礼衣裳を着せて展示する方法を考案したと考えられる。また、当時名高い美容家である遠藤波津子女史によって婚礼衣裳を着せ付けたようである。

その後、1926年10月15日付の『朝日新聞』と『読売新聞』が同時に松屋の広告を掲載し、婚礼衣裳調度品陳列会を宣伝する一環として、11月14日まで銀座店の7階で「結婚風俗展覧会」を開催すると紹介されている³³。具体的には、「結婚風俗展覧会」では、神代から大正（当時）までの特徴的な結婚風俗を面白く人形に応用して展示するようである。

ここまで、「新時代」「新し味」「現代趣味」といった言葉を用いたり、人形マネキンを利用したり、伝統と一線を画す新しい婚礼衣裳をアピールしていた各百貨店の様子を見てきたが、さらに、女優と俳優に演じて結婚式を模擬する実演のイベントまで考えるようになった。

1928年、銀座の松坂屋が9月15日より開催する婚礼衣裳陳列会の宣伝において、模擬結婚式を実演するイベントを予告している³⁴。婚礼衣裳を着付けてもらうのは人形ではなく、現実の人々であり、さらに松竹キネマスターが出演して行われる予定である。当時の様子は詳細が分からないが、模擬結婚式を通じて、松竹キネマスターの俳優と女優たちが百貨店特選した婚礼衣裳を着用することで、宣伝の効果が相当なものだったのだろう。そして、同月の30日には、上野の松坂屋も婚礼衣裳陳列会を開催し、同時に婚礼の結髪、化粧、着付けの実演も行われたようである³⁵。その実演は別館で行われ、翌月の1日から6日まで正午から

開始された。6日間にわたり、2日ずつ異なる3組による結髪と着付けの実演を計画し、来場者にさまざまな花嫁スタイルと当時のトレンドを披露しようとした。

それでは、簡単にまとめてみよう。1910年代以降、関西の百貨店である高島屋や三越（大阪支店）は早くから婚礼衣裳陳列会を開催するようになった。1915年頃、松坂屋は『朝日新聞』に婚礼衣裳陳列会の広告を掲載している。その後、呉服屋系の百貨店も婚礼衣裳を宣伝するために婚礼衣裳陳列会を開催したり、一般の雑誌や新聞で婚礼衣裳陳列会の情報を宣伝したりするようになった。もう一つ注目すべきところは、1910年代以前の婚礼衣裳には見られない「新しさ」が、1920年代になるとしばしば広告で目立つようになったことである。これは、近代日本の婚礼衣裳において新しさを求める最初の時期であり、革新の時期であったと考えられる。

3. 百貨店が提案した黒地の式服

三越が創刊した機関誌『三越』³⁶では、1910年代からしばしば上流社会の実際の花嫁の婚礼衣裳に関する記事が載せられ、その中で黒地の婚礼衣裳に関する情報も確認できる。例えば、1913年頃の記事では、大阪三越調製の某家の令嬢の婚礼衣裳が写真とともに詳しく掲載されている³⁷。この衣裳は「黒縮緬に桐と鳳凰の模様」で、鮮やかな色使いの振袖であった。同じく「大阪三越調製の某家令嬢の婚礼衣裳」として取り上げられたものは、帯付きの白い紋綸子で、金と銀の刺繍が施され、非常に高級で優雅な1着であった。記事によれば、白い紋綸子は儀式に、黒地の振袖は色直しの正装として利用された可能性がある。この時点では、黒地の婚礼衣裳はまだ主に式服として認識されていないと考えられる。

三越以外でも、白木屋が調製した婚礼衣裳においても、黒地の衣裳が確認されている。白木屋の機関誌である『流行』の第11年4月号には、滋賀県櫻川の富豪の令嬢が白木屋製の婚礼衣裳を着用した写真が2枚掲載されている³⁸。その中の一枚は紫紺地の打掛で、もう一枚は地質黒縮緬の松模様のもので、さらに三枚重ねになっているとされている。この令嬢の場合も、黒地の衣裳は主に色直しの正装として使用されていたと考えられる。

一方で、1915年11月、帝都の4大呉服店が流行を調査した記事において、松坂屋が婚礼衣裳陳列会を開催し、上流階層の女性向けに当時流行している式服について提案している³⁹。「上着黒縮緬、下着白縮緬、模様は上着に松に鶴などを応用した模様をつけて下着の白にもあっさりと竹梅などの模様を染出します」と述べ、黒地の振袖を勧めている。また、中流階層向けには、「上着を黒縮緬のとめ袖にして下着は羽二重模様はやはり松竹梅に因んだものです」と同じく黒地の縮緬を提案しているが、経済的な理由から振袖ではなく袖が短い留袖が適しているとしている。また、中流家庭では、儀式に色変わりをを用いずに済みます場合、多くの人が黒を略して薄色のみを用いることが一般的であるとも述べている。この事例から、1910年代には呉服屋系百貨店の中で、振袖や留袖を問わず、黒地の衣裳を同時に上流階層と中流階層に勧める百貨店が存在していたことが明らかになった。

また、1919年11月11日から高島屋が開催していた婚礼衣裳陳列会においても、黒地の式服の例が確認できる。当時の婚礼調度は他の流行とは異なり、「昔風の優美な古雅なものが喜ばれる」傾向があった。例えば、それまで東京ではあまり用いられていなかった打掛が流行し始めた。また、「振袖は黒縮緬又は錦紗縮緬等で蓬莱山とか松に孔雀等の模様」が好まれるようになったと報じられている⁴⁰。

こうした中で、東京のファッションシーンを牛耳る存在である三越は、いつから黒地の婚礼衣裳を式服として提案し始めたのだろうか。1922年8月2日、三越は西館2階の呉服売りの西北隅に、「御婚礼調度係」という新しい売り場を設けた⁴¹。これは、増築された後、各売り場の距離が遠くなったことから、顧客の時間を節約し、ゆっくり相談できる店員を配置するためのものであった。この売り場の近くには、「御衣裳御調度品」の主要なアイテムがケースに入れられて陳列されていた。その後、三越の機関紙である『三越』には、具体的な婚礼衣裳の紹介が始まり、さらにはカラー写真まで頻繁に掲載されるようになった。1925年11月には、「三越特製婚礼式服」という見出しで、黒古濱縮緬紋付振袖模様が前後2枚のカラー写真で紹介されている⁴²。そして、1926年1月に発表された「三越特製婚礼衣裳」では、色地のもの以外にも、「黒一越縮緬鳥原模様」の黒

地の振袖が掲載されている⁴³。続いて、1926年11月には、「三越特製婚礼衣裳」として、2着の婚礼衣裳が紹介され、いずれも黒地のものであった⁴⁴。「黒一越縮緬振袖」(八掛付後懸模様)と「黒一越縮緬石持留袖」(八掛付)が具体的な例である。また、1928年の「三越特製御婚禮式服」では、3着の婚礼衣裳が紹介されており、「左上と左下の写真はそれぞれ、黒ミラネーゼ縮緬振袖総模様(大和絵)と黒一越縮緬詰袖で、袖が長い振袖と袖が切った短い留袖の2種類が紹介されている。このように、黒地の婚礼衣裳は三越が推奨する主要なスタイルとなり、3着の中で2着が占められていた。さらに、1929年10月号の『三越』には、当月1日から10日まで開催された婚礼衣裳陳列会の情報が掲載されており、その半分为「黒一越縮緬島原総模様振袖八掛付」と「黒縮緬島原総模様振袖」など、黒地の振袖であった⁴⁵。

一方、1930年代以降、『三越』(1930年10月)では、10月1日から10日まで開催された「婚礼衣裳陳列会」に展示された衣裳が紹介されている。5着の婚礼衣裳の中で、モデルが着用している衣裳についての情報は明示されていないが、他の4着の花嫁衣裳についての情報を見てみると、その半分为黒地のものであった。具体的には、「黒一越縮緬石持振袖松竹梅模様」(八掛付)と「黒一越縮緬石持詰袖模様」(八掛付)など、黒地の振袖と留袖が含まれていた。

1932年の『三越』には、御婚礼調度品売り場に陳列された商品の一部が紹介されている。式服として、「黒一越縮緬紋付後掛詰袖模様」、「黒一越縮緬紋付振袖島原模様」、「黒一越縮緬紋付振袖島原模様」などが掲載されている。また、花嫁用の色物として、「色古濱縮緬紋付振袖島原模様」と「色一越縮緬紋付振袖島原模様」の2種類も同時に発表された。ここから、三越が提案している婚礼衣裳の中で、黒地のものが半分以上を占めており、明らかに婚礼衣裳の主流となっていたことがうかがえる。同じく1932年の『三越』(第22巻第11号、1932年11月)では、婚礼季節に向けて最新の流行の式服を紹介し、「黒紋錦紗紋付振袖島原裾模様」の1着を掲載している。

これまでの議論から明らかなように、三越は『三越』という機関誌を通じて黒地の婚礼衣裳を紹介するとともに、特製の婚礼衣裳や婚礼陳列会において販売された婚礼衣裳として、黒地の婚礼衣裳が次第に主流となっていくことがわかつ

た。一方で、三越が提案していた黒地の婚礼衣裳には、振袖と留袖の2つのタイプがあったことも確認できる。

4. メディアに登場する黒地の婚礼衣裳

1920年代に入ると、雑誌や新聞において、「現代風」の花嫁姿が紹介される際には、しばしば黒地の婚礼衣裳に関する記事や写真が登場した。例えば、1925年4月の『婦女界』の口絵写真では、花嫁が身に着けている式服が黒地の中振である様子が紹介されている⁴⁶。写真横の説明文によれば、このような「現代的な」花嫁の衣裳は、当時一流の着付け師である遠藤波津子によるものであったとされている。また、1929年の『主婦の友』では、口絵のカラー写真に、黒地の婚礼衣裳を身にまとった花嫁の姿が写っている⁴⁷。モデルの筑波雪子さんは黒地の振袖を纏い、裾には「光琳風の松を朱の濃淡一色で出し、胸と袖とに純白のつるを飛ばして、朝陽麗らかなお目出度い感じを極く淡彩に染め出したもの」というデザインであった。彼女が身に着けている婚礼衣裳は、三越呉服店が特製したもので、着付けと髪型の担当は有名人の遠藤波津子と木村すえ子とされている。

さらに、一般的にあまり人気のない暑い夏（エアコンがない時代）に結婚式を挙げる場合でも、黒地の式服が流行していたようだ。1925年の『婦女界』には、「この頃流行の夏の結婚式服」と題された記事があり、「夏でも白無垢に打掛とといったような式服を用いる方もありますが、これは特別の方々で、一般的には黒紵の式服が多いようです」と記述されている⁴⁸。言い換えれば、白無垢を式服として選ぶのは一部の人々であり、一般的な傾向としては黒紵の振袖が主流であったことが理解できる。

総合的に見ると、第2節で述べたように、1920年代以降、婚礼衣裳陳列会において「新しさ」や「現代趣味」を求める傾向があり、メディアで紹介される花嫁の写真においても「現代風」というキーワードと同時に、黒地の婚礼衣裳が頻繁に登場していたことが確認できる。1930年代以降、新聞紙においては黒地の婚礼衣裳に関する情報が一段と増加した。これは、1930年代に入ると、『朝日新聞』と『読売新聞』の2大新聞において、婚礼衣裳陳列会関連の広告が増加したことが一因と考えられる。それに伴い、各百貨店が発行した広告には、流行の婚

礼衣裳を身に纏った花嫁のイラストや写真が頻繁に登場するようになった。

1930年9月2日白木屋が開催する「御婚礼衣裳陳列」の広告では、帯の模様や結び方を含む花嫁の後ろ姿を強調している⁴⁹。広告には具体的な商品の金額も掲載され、88圓から350圓まで幅広い価格帯の婚礼衣裳が紹介されている。特に注目すべきは、これらの婚礼衣裳が全て「黒」という地色を持っていたことである。

次に、三越の婚礼衣裳陳列の広告の中で、花嫁のイラストが用いられるようになった⁵⁰。広告によれば、1932年10月から20日まで、東京日本橋の三越本店の3階新館で婚礼衣裳陳列が行われることとなった。また、三越は1933年1月5日に発表した「春の御婚礼衣裳陳列」の広告において、新しい花嫁のイラストを掲載している。今回の花嫁はおそらく文金高島田を被り、着物は黒地の模様入り振袖のように見受けられる。

そして、1934年9月19日、東京日本橋の高島屋が『読売新聞』（朝刊、6頁）に「御婚礼衣裳大特売」のイベントのニュースを発表した。他の百貨店と同様に、広告には婚礼衣裳を身に纏った女性モデルのイラストが掲載されている。女性が着用している着物は、他ならぬ黒地の振袖であった。この広告からの情報を基にすれば、おそらくその振袖の素材は黒古濱縮緬振袖であっただろう。

その後、東京松坂屋が行った「秋の通信大提供」という広告では、婚礼衣裳に関する情報が発信され、モデル女性の写真も掲載されている⁵¹。写真には「い」と「ろ」の2人の女性が異なる婚礼衣裳を着用しており、「い」は「黒一越縮緬振袖模様」で98圓、「ろ」は「黒縮緬留袖模様」で38圓という値段が記されている。他にも、「は」と「に」の振袖と「ほ」の留袖の写真が掲載され、それぞれ異なる値段と思われるが、素材はほぼ「黒一越縮緬」か「黒縮緬」であったと考えられる。松坂屋の広告は1例であるが、黒地の振袖と留袖が明らかに婚礼衣裳の主流となっていたことが窺える。

ついに『御婚礼のお支度は高島屋』との定評をもらった高島屋が「読売新聞」に出した広告にも、花嫁姿の女性モデルの写真が登場した⁵²。婚礼衣裳陳列会は8階の大会場にて21日から27日までの期間で開催される予定であった。広告には、「御婚礼衣裳大奉仕」の情報も同時に掲載されており、「黒古濱縮緬振袖

模様」のものが「50 円より」、「黒古濱縮緬留袖模様」の場合は「18 円より」という価格帯で提供されていた。面白いことに、11 月 9 日付の「読売新聞」では、高島屋が「御婚礼衣裳大奉仕」の広告を再び掲載した。今回の奉仕品のリストも公開され、例えば、「黒縮緬振袖模様は 50 円より、黒縮緬留袖模様は 20 円より」といった内容であった。

1933 年 9 月 18 日、白木屋が初めてリアルな女性モデルを使用して以来、広告に花嫁姿の写真を載せ、自社の婚礼衣裳の魅力をアピールしようとする百貨店が増えた。しかし、1936 年になると、このような現象が急速に減少した。1936 年から 1938 年までの期間、花嫁衣裳を身に纏っている女性モデルの写真を広告に掲載した回数は、松坂屋を除いて、白木屋、三越、浅草松屋、高島屋がそれぞれわずか 1 回であった。戦争の影響や物資不足の中で、贅沢な写真を使用して花嫁衣裳を宣伝することは不適切と考えられた可能性がある。と言っても、各百貨店がこの特殊な背景の中で花嫁衣裳を提案し続けている。

1936 年 9 月頃、白木屋と三越が掲載した広告には、最新の花嫁衣裳を女性モデルに着せて登場している。白木屋の花嫁は黒地の振袖に派手な模様が施されている様子が見受けられる⁵³。三越の場合は、花嫁が色地の振袖を着用し、派手で華やかな模様が施されている⁵⁴。1937 年 10 月 1 日付の浅草松屋の広告では、花嫁姿のモデルが派手で華やかな振袖を着用し、白い角隠しを被って西洋風の椅子に座っている様子が中央に配置されている。大きな結びが後ろについており、いかにも豪華な花嫁衣裳であることが伺える⁵⁵。戦時中になると、新聞においてリアルな女性モデルを使って花嫁衣裳を紹介する機会が減少した。しかし、その一方で、花嫁衣裳のデザインや模様、そして着付けにおいて、以前よりも派手で華やかなものが好まれるようになった傾向が見られた。

戦前までの雑誌や新聞の記事、広告、写真において、特に 1920 年代から 1930 年代にかけて、黒地の婚礼衣裳に関連する情報が主に集まっているようである。1920 年代以降、黒地の婚礼衣裳への需要が高まる中で、同時に「現代性」すなわちモダンで流行の要素を求める傾向が浮き彫りになってきた。

終わりに

以上の考察を通じて、大正時代から昭和初期にかけて、黒地の婚礼衣裳の流行の実態と変遷過程が明らかになった。具体的には、1910年代以降、婚礼衣裳陳列会の開催により、伝統とは異なる「新しさ」が花嫁の婚礼衣裳に求められ、その中で黒地の婚礼衣裳が特に注目され、呉服屋系百貨店の主要な宣伝対象となった。

婚礼衣裳陳列会の広告を通じて、1910年代以前には見られなかった「新しさ」が1920年代以降、広告で目立つようになった。具体的には、1924年9月頃に白木屋が初めて「新時代の婚礼衣裳」を提案し、同じく1924年11月には松屋も「新し味」を強調した。続いて、1925年には三越が「現代趣味」の婚礼衣裳を提案した。さらに、人形マネキンを用いたり、女優や俳優が婚礼衣裳を身に纏いて模擬式典を行うイベントを開催したりするなど、昔ながらの伝統的な婚礼衣裳とは異なる「現代風」の婚礼衣裳を展示・販売していたと考えられる。総じて、従来の婚礼衣裳に対する「新しさ」や「現代趣味」、つまり伝統的なものに革新を求める傾向が主に1920年代後半に集中していたことが分かった。

一方で、20世紀初頭の雑誌と新聞の記事、広告、写真において、黒地の婚礼衣裳に関する情報は主に1920年代から1930年代に焦点が当てられている。1920年代以降、黒地の婚礼衣裳への需要が高まる中で、「現代風」、つまりモダンで流行の要素を求める傾向が浮き彫りになっている。もちろん、それ以前、すなわち1920年代以前には、黒地の婚礼衣裳は存在していたが、それは伝統風（旧型）のものであり、主に地色を「三つ揃い」あるいは模様を「三つ揃い」の形で用いられていたと考えられる。しかし、1920年代以降、呉服屋系の百貨店は「現代性」や「新しさ」を追求し、婚礼衣裳陳列会を開催し、新聞や雑誌に広告を出して、近代的で新しい婚礼衣裳を提案した。その中で、黒地の振袖（時に留袖も含む）が当時の最もおしゃれな婚礼衣裳として台頭した。要するに、百貨店の発展に伴い、新聞と女性雑誌の宣伝力を借りて、黒地の式服は大正・昭和初期の代表的な婚礼衣裳となったのである。

また、大正・昭和初期において流行した黒地の婚礼衣裳は主に振袖であり、時折留袖も用いられていた。身分制度の撤廃にもかかわらず、社会の各層に合わせ

て、一般的に着用された婚礼衣裳は以下の通りである。白無垢（打掛を含む）は主に上流階層や裕福な階層の女性に選ばれた。一方で、黒地の振袖は主に中流以上の女性に人気であり、特に中流階層の上位層の女性が愛用していた。黒地の留袖は一般的に中流階層の女性に好まれたが、時折上流階層の女性も選ぶケースもあった。

最後に、1920年代以降、「現代風」「新しさ」「現代趣味」といったキーワードを用い、婚礼衣裳を紹介したり宣伝したりする際に、下記の特徴に気づいた。例えば、コーディネートは黒地の婚礼衣裳に洋風の髪型を組み合わせ、衣裳と着付けは当時の一流の着付け師と美容師が手がけ、新調の衣裳はほとんど〇〇百貨店特製のものが取り上げられることがある。つまり、百貨店が特製した衣裳を使用し、一流の着付け師と美容師によるおしゃれな着付けと最新の髪型（場合によっては日本髪も含む）が、大正・昭和初期の最先端の花嫁ファッションとなっていた。

もちろん、婚礼衣裳における変遷を単に「流行」として捉えるのは不十分である。より広い視野、たとえば生活文化、習慣、および儀礼の変化からも考察する必要がある。このため、今後の研究において取り組むべき課題と考えている。

注

- 1 江馬務「花嫁風俗の変遷―色直し」『江馬務著作集第7巻一生の典礼』中央公論新社、1976年、424頁。
- 2 長崎巖「近代の婚礼衣裳についてのまとめ」『日本の婚礼衣裳 寿ぎのきもの』東京美術、2021年、164頁。
- 3 嘉本伊都子『『白』と『黒』の近代——写真花嫁とスピンオフしたモダニティ』『ヌードの東アジア』淡交社、2023年、335頁。
- 4 花嫁の婚礼衣裳は、大まかに言って主に「式服」と「色直し」の2つに分けられる。『日本国語大辞典』によれば、「式服」は礼服や儀式で着用する服であり、「色直し」は披露宴の途中で花嫁が式服を脱いで、別の色模様の衣服に着替えることを指す。また、本稿では、地色を強調し、婚礼衣裳の全体的な議論をする際に、「黒地の婚礼衣裳」という用語を使用する。儀式の服を説明する際には、基本的に「式服」という言葉を用いる。黒地の種類を詳細に述べる際には、「黒地の振袖」と「黒地の留袖」という表現

を使用する。

- 5 道前美佐緒の研究によれば、明治・大正期に流行した「三襲」の振袖は三枚重ねで、主に披露宴で用いられていたものであるとされている。本稿で論じる新型の黒地の婚礼衣裳はそれとは異なるものである。道前美佐緒、「婚礼衣裳『三襲』について」『名古屋文化短期大学研究紀要』第40集、2015年、42頁。
- 6 増田美子『日本衣服史』吉川弘文館、2010年、280、322頁。
- 7 長崎巖「近代の婚礼衣裳についてのまとめ」『日本の婚礼衣裳 寿ぎのきもの』東京美術、2021年、128頁。
- 8 「式法」『家庭のしるべ』第8号、白木屋洋服呉服店、1905年2月、17-18頁。
- 9 「式法」『家庭のしるべ』第8号、白木屋洋服呉服店、1905年2月、21頁。
- 10 「白無垢と裃の新しい婚礼服」『主婦の友』、1925年10月、219-221頁。
- 11 「五大呉服店好みの婚礼衣裳」『婦女界』第34巻第5号、1926年11月、284-285頁。
- 12 「結婚式服の移りかわり」『読売新聞』1934年11月5日、朝刊、9頁。
- 13 谷撰山編『最近商工史：報知新聞第壹万五千号記念』報知社、1918年、161、164頁。
- 14 三越本社編『株式会社三越 100年の記録：1904-2004：デパートメントストア宣言から100年』京：三越、2005年、37-38頁。
- 15 大阪高島屋本部 編『大阪高島屋四十年史』大阪高島屋本部、1937年、114頁。
- 16 「越後屋新案呉服陳列場」『風俗画報』1895年12月10日。
- 17 「新柄陳列会を観る」『風俗画報』第230号、明治34年4月15日。
- 18 『三越』第2巻第3号、1912年3月、7頁。
- 19 「東洋名物大阪三越呉服店」『実業界』第10巻（新年増刊）第2号、早稲田同文館、1915年1月、6-7頁。
- 20 『東西織物界』第8年第94号、東西織物界社、1915年10月、23頁。
- 21 『東西織物界』第8年第95号、東西織物界社、1915年11月、14頁。
- 22 『織物界』第186号、勝島活版所、1917年11月、7頁。
- 23 『朝日新聞』東京朝刊、1915年9月30日、7頁。ただし、当時使用されている商号は松坂屋ではなく、「いとう呉服店」であった。
- 24 『三越』第6巻第10号 1916年10月、6頁。
- 25 『東洋時報』第217号、東洋協會、1916年10月、頁数なし。
- 26 『東京商業會議所月報』第9巻第10号、東京商業會議所、1916年10月、頁数なし。『實力世界』第7巻第11号、實力協會、1916年11月、頁数なし。『世の中』第2巻第12号、書實業之世界社、1916年11月、頁数なし。
- 27 『読売新聞』1924年10月9日、朝刊、7頁。
- 28 『三越』第12巻第11号、三越、1922年11月、4頁。
- 29 『朝日新聞』1925年10月25日、東京・朝刊、3頁。

- 30 『読売新聞』1926年10月21日、朝刊、7頁。
- 31 『朝日新聞』1924年9月24日、東京・朝刊、4頁。
- 32 『朝日新聞』1924年11月25日、東京・夕刊、2頁。
- 33 『朝日新聞』朝刊、4頁。『読売新聞』朝刊、3頁。いずれも1926年10月15日。
- 34 『読売新聞』1928年9月14日、朝刊、6頁。
- 35 『読売新聞』1928年9月30日、朝刊、6頁。
- 36 『三越』は、1911年百貨店の三越が創刊した機関（PR）誌である。
- 37 『三越』第3巻第12号、三越、1913年12月、16-17頁。
- 38 『流行』第11年4月号、白木屋呉服店、1914年4月、1頁。
- 39 『東西織物界』第8年第95号、東西織物界社、1915年11月、14頁。
- 40 『東西織物界』第12年第143号、東西織物界社、1919年11月、7頁。
- 41 三越「三越日記」『三越』（第12巻第9号）、1922年9月、29頁。
- 42 三越『三越』（第15巻第11号）、1925年11月、3頁。
- 43 三越『三越』（第16巻第1号）、1926年1月、7頁。
- 44 三越『三越』（第16巻第11号）、1926年11月、16頁。
- 45 三越『三越』（第19巻第10号）、1929年10月、2-3頁。
- 46 「現代的な花嫁姿」『婦女界』第31巻第4号の口絵写真、1925年4月、口絵写真。
- 47 「新春の花嫁姿」『主婦の友』第13巻第1号（新年特別号）1929年1月、口絵写真。
- 48 「この頃流行の夏の結婚式服」『婦女界』第32巻第2号、1925年8月、225頁。
- 49 『読売新聞』1931年9月2日、朝刊、1頁。
- 50 『読売新聞』1932年11月10日、夕刊、3頁。
- 51 『読売新聞』1934年10月14日、4頁。
- 52 『読売新聞』1935年9月21日、夕刊、3頁。
- 53 『読売新聞』1936年9月9日、夕刊、7頁。
- 54 『読売新聞』1936年9月12日、朝刊、6頁。
- 55 『読売新聞』1937年10月1日、第2夕刊、1頁。

付 記

本研究はJSPS 科研費（特別研究員奨励費）22J00527 の助成を受けたものです。

劉 玲芳（リュウ レイホウ）（東京大学東洋文化研究所・学振PD）

The Trend of Black Wedding Attire in the Taisho and Early Showa Era: Focusing on the Involvement with Department Stores

LIU Lingfang

Until now, it has been said that traditional Japanese wedding attire is the 'shiro-muku'. However, when and why did Japanese black formal wedding garments become the most popular during the Taisho and early Showa periods in Japan? What led prominent kimono department stores, which were at the forefront of Japanese fashion at the time, to prefer black formal wedding garments?

This paper aims to uncover the reality of the popularity of Japanese black formal wedding garments from the Taisho era to the early Showa era and examine the process by which black formal wedding garments became a fashion trend. Additionally, it explores the involvement of kimono department stores in the popularity of black formal wedding garments during this period.

Through the analysis, the popularity and evolution of Japanese black formal wedding garments wear during the Taisho to early Showa periods have come to light. Specifically, the hosting of bridal attire exhibitions gave rise to a desire for novelty distinct from tradition. Within this context, black formal wedding garments garnered attention and became a focal point in the advertising efforts of kimono department stores.

In general, it became evident that the desire for 'novelty' and 'contemporary taste,' seeking innovation in traditional wedding attire, was predominantly concentrated in the late 1920s. On the other hand, information about black formal wedding garments in the early 20th century, as seen in magazines, newspapers, advertisements, and photographs, primarily focuses on the late 1920s to the 1930s. As demand for black formal wedding garments increased from the 1920s onward, a trend emerged for a 'modern' style, emphasizing elements that were both modern and fashionable.